

青年期のアタッチメントと共感性及び自我状態との関連

警察庁犯罪被害者支援室

上田 鼓

教育学研究科

高木 秀明

問題

本研究の目的は、自己報告式測度で測定されるアタッチメントの2次元が共感性及び自我状態とどのような対応関係にあるのかを明らかにすることである。

アタッチメントとは、Bowlby (1969/1982/1991)によれば、他者を求め、他者に接近しようとすることであり、一生を通じて機能するものである。発達と共に個人差が明確になり、安定的なアタッチメントをもつ乳幼児は、適応的な情動調整を行うことができるが、未組織状態のアタッチメントをもつ乳幼児は、不安が高じると奇妙な行動をとるなどする。長じて成人のアタッチメントは特定の測定方法により、いくつかのスタイルに振り分けられるとされる(数井,2012)。

Cooper et al. (2004/2008) は、青年期におけるアタッチメント・スタイルが成人期早期における個人内適応を予測するかどうかについて実証的研究を行った。その結果、安定型・不安定型・回避型の3類型によるアタッチメント・スタイルの個人差は、約5年後のそれぞれの適応パターンを予測していた。このことからすれば、アタッチメント・スタイルは、青年期から成人期にある個人の適応を考えるにあたって重要な指標であるといえるであろう。

成人のアタッチメント・スタイルを測定するための方法としては、AAI (Adult Attachment Interview; アダルト・アタッチメント・インタビュー) (George et al.,1996) と自己報告式測度の2つに大別できよう。AAIは、成長していくに従ってアタッチメントが表象化されることを前提に、それが言語行動にどのように表れるのかを測定するために、半構造化された面接を行う手法である(数井,2012)。一方、自己報告式測度の代表的なものにはECR (Experiences in Close Relationships scale; 対人関係体験尺度)が挙げられる。ECRは、Brennann et al. (1998) が先行するアタッチメント・スタイル次元尺度について分析を行った結果、アタッチメント不安

(分離や見捨てられることへの恐れ、自己モデル) とアタッチメント回避(親密性や依存性への不快感、他者モデル)の2次元へ集約できるとして作成した尺度であり、現在規準的なものとみなされつつある(中尾・加藤, 2004; Shaver & Mikulincer,2004/2008)。

AAIと自己報告式測度の2つの測度については、異なった領域が測定されているという研究者と、両者に有意な相関を主張する研究とがあり、一致をみていない。なかでも自己報告式測度は、力動的な深み、多面的な要素を引き出すことができないという問題点が指摘されているところである(Shaver & Mikulincer,2004/2008)。しかし、Shaver & Mikulincer (2004/2008) は様々な研究をレビューする中で、それらの指摘が完全に妥当性を欠いている訳ではないが、自己報告式測度であっても重要な他者との表象内容に関連があるとする研究は蓄積されており、潜在的・無意識的側面とも関連を持つことを主張している。また、青年期・成人期における自己報告式測度を用いた実証的な研究も散見されるところである。

安藤・遠藤(2005)は、自己報告式測度を用いた青年期・成人期のアタッチメント研究を概観する中で、男性は女性と比べて拒絶回避型(自己モデルは肯定的、他者モデルは否定的)が多い一方、女性はとらわれ型(自己モデルは否定的、他者モデルは肯定的)が多く、男性は独立や達成を重要視しているが、女性は関係性を重要視しているためであることを指摘している。

自己報告式測度の次元に関する研究として、島(2012)は、アタッチメント・スタイルと有能感スタイルの対応関係について大学生を対象とした質問紙調査を行い、アタッチメントの「不安」と仮想的有能感の「自尊感情」に負の中程度の相関が得られたが、アタッチメントの「回避」と仮想的有能感には弱い相関しなかったことを示した。その理由として、仮想的有能感の他者軽視傾向は他者に対する否定的評価である一方、アタッチメント尺

度の「回避」の捉える他者とは強く賢いものに対する期待・信念であり、“他者”についての考えの違いが反映したものと考察している。

これらはいずれも自己報告式測度を利用した研究であるが、測度については現在用いられている「不安」「回避」の2次元でアタッチメントを測定することの適否を巡る議論がある。Shaver & Mikulincer (2004/2008) は、先行研究において、測定空間の軸を回転させることによって、安定性—不安定性、不安—回避という軸で査定する方が有用かも知れないとする主張が存在しており、測度を改善するために更なる研究が必要であることを指摘した。

また、遠藤 (2008) は、アタッチメントの「安定型」が全ての適応を予測するかのように扱われる傾向にある点を危惧し、他の型がいかなる適応性を発揮するのかを検討すべきことを課題として挙げている。すなわち、2次元に置き換えれば、それぞれを良い—悪いといった側面で捉えるのではなく、次元の機能性にも着目することが必要だと考えられる。

以上のことから、「不安」「回避」の2次元が、他の概念といかなる関連をもち、何を明らかにするものであるかを実証的に検討することは有効であると思われる。アタッチメント測度の成り立ちからも、「不安」は自己観に関する要因、「回避」は他者観に関する要因と関連をもつことが推測される。

他者の次元に関連する概念として、様々な変容を伴う青年期において重要視されるものの1つに共感性が挙げられる。共感性とは、「他者の経験する感情を見た側に、それと一致した、あるいはそれに対応した感情的反応が起こること」をいい (登張, 2003)、他人の悲しみについてのあわれみの感情に限定される「同情」とは区別される (Davis, 1994/1999)。他者に対するポジティブなイメージを保持していれば、他者に対して共感する場面も多いと推測される。他者に共感できるか否かについては、その後の人生において重要な役割を担うと考えられ、青年期における共感性研究も多い。近年の共感性研究では、個人の資質的特性としての共感性を、感情反応が他者志向的／自己中心的か、共感が生起するプロセスといった複数の要素からなる多次元的視点からとらえることが主流である。アタッチメントの「回避」が強ければ他者志向的な共感性の低さと関連することが推測される。また、アタッチメントの「不安」は不安要素のつ

ながりから、不安や苦痛など他者に向かわない自己中心的な感情反応をする共感性の高さと関連するかも知れない。

自己に関連する次元を測定するには、性格検査を始め様々な測度があるが、わが国においては、信頼性・妥当性のあるものの1つに TEG (Tokyo University Egogram; 東大式エゴグラム) が挙げられる。TEG では3つの自我状態をさらに5つに区分して個人のパーソナリティを捉えようとするものであり、様々な分野で広く用いられており、比較可能な利点がある。アタッチメントの「不安」が強いことは、依存心の強さや自己評価の低さなど TEG の「AC (Adapted Child)」と関連し、父母的な役割を担う「CP (Critical Parent)」、「NP (Nurturing Parent)」との関連は低いことが推測される。また、「回避」の強さは「NP」と負の関連を持つ可能性もあるだろう。

加えて TEG では5つの下位尺度の高低から各個人のプロフィールパターンを判定することができ、アタッチメント尺度は2次元の組み合わせにより4つの愛着スタイル群を反映すると想定されている (中尾・加藤, 2004)。よって、各調査対象者における TEG のプロフィールパターンとの関連についても検討することで、アタッチメントの次元の機能面をより包括的に捉えることにつながると考えられる。その際、Bowlby のアタッチメント理論の中心は「恐れ」の調節であり、アタッチメントは乳児が感じる恐れが養育者によって繰り返し調整される中で発達するものである (数井, 2012) ことに基けば、自我状態の中でも「子ども (C)」の部分に着目し、「自由な子ども (FC)」及び「順応した子ども (AC)」が優位な型とアタッチメントとの関連性について検討を行うことが適切だと考えられる。

本研究では、アタッチメントの測度と共感性及び自我状態との対応関係について検討することで、アタッチメント測度で用いられる2次元がいかなる領域を測定しており、どのような機能を果たしているのかについて明らかにすることを目的とし、青年期を対象とした実証的研究を行うこととした。

方法

1 調査対象者

国立大学の学部生及び大学院生 34 名を対象とした。

2 実施時期

2014 年 9 月

3 手続き

調査対象者に対して、講義時間中に、口頭と書面で調査の目的と内容を説明した上で調査を依頼し調査票を配付、回収した。

4 倫理的手続き

質問紙の説明書きとして、質問紙への回答は任意であり、回答しなくても不利益を被ることはないこと、結果は公表される予定であるが、回答は無記名式であるため個人が特定されることはないことを明記した。

5 調査項目

- 1) 回答者の属性は、性別、年齢の質問で構成された。
- 2) アタッチメントは、Brennan et al. (1998) が「親密な対人関係体験尺度 (the Experiences in Close Relationships inventory, ECR)」として作成したものを、恋人でなく一般化された他者を対象として、中尾・加藤 (2004) が作成した「一般他者版成人愛着スタイル尺度 (the Experiences in Close Relationships inventory-the generalized-other-version, ECR-GO)」を使用した。「見捨てられ不安」(自己観がネガティブ)と「親密性の回避」(他者観がネガティブ)の2下位尺度からなる。回答は、「全く当てはまらない」1点から「非常によく当てはまる」7点の7段階評定で求めた。
- 3) 共感性は、登張 (2003) の作成した青年期用の多次元的共感性尺度を用いた。既存の複数の共感性尺度をもとに、共感性を多次元的に捉える尺度として作成されている。「共感的関心」(他者の不運な感情体験に対し、自分も同じような気持ちになり、他者の状況に対応した、他者志向の暖かい気持ちをもつ)、「個人的苦痛」(他者の苦痛に対して、不安や苦痛など、他者に向かわない自分中心の感情的反応をする)、「ファンタジー」(小説や映画などに登場する架空の他者に感情移入する)、「気持ちの想像」(他者の気持ちや状況を想像する)の4下位尺度からなる。回答は「全くなし」1点、「少し」2点、「中くらい」3点、「かなり」4点、「非常に」5点の5段階評定で求めた。
- 4) 性格検査は、新版 TEG II (東京大学医学部心療内科 TEG 研究会, 2006a) を用いた。CP (父親的な役割を担う批判的な親の自我状態)、NP (母親的な役割を担う養育的な親の自我状態)、A (事実に基づき、物事を客観的かつ論理的に理解し、判断しようとする成人の自我状態)、FC (もって生まれた自然な姿である自由な子どもの自我状態)、AC (親の影響を受けた順応した子どもの

自我状態)、L (lie 尺度) の6下位尺度からなる (東京大学医学部心療内科 TEG 研究会, 2006b)。回答は、「いいえ」0点、「どちらでもない」1点、「はい」2点の3段階評定で求めた。

結果

1 回答者の属性

調査対象者34名の属性を表1に示す。内訳は、男性9名、女性25名であり、平均年齢は20.529歳 (SD=1.440)。

表1 調査対象者の属性(n)

	男性	女性	合計
19歳	3	6	9
20歳	3	10	13
21歳	0	2	2
22歳	3	3	6
23歳	0	3	3
24歳	0	1	1
合計	9	25	34

2 尺度の検討

欠損値は共感性を尋ねた項目の1つのみであったため、「0」を代入した。ECR-GO、多次元的共感性尺度、TEG II について、主成分分析により第1成分の負荷量が.400以上であることを基準とし、各下位尺度の検討を行った。

ECR-GO の下位尺度のうち、「見捨てられ不安」における項目16「私は、人にもっと自分の感情や自分たちの関係に真剣であることを示させようとしているのを感じる」ときどきある」及び「親密性の回避」における項目25「私は人に頼ることに抵抗がない」は第1成分の負荷量がいずれも.370を示したが、極端に低い値を示していないため、本研究においては全項目を採用することにした。

多次元的共感性尺度の各下位尺度のうち「共感的関心」において、項目22「ニュースで災害にあった人を見ると、同情してしまう」は第1成分の負荷量が.372であったが、極端に低い値を示していないため、採用することにした。項目5「体の不自由な人やお年寄りに何かしてあげたいと思う」、項目24「私は身近な人が悲しんでいても、何も感じないことがある」は、第1成分の負荷量が順に.128、.108と低い値を示したため、除外することにした。

TEG II の下位尺度で第1成分の負荷量が低い値であったのは、「CP」における項目2及び項目51(順に.316:.198)、

「NP」における項目 21 (.345)、「A」における項目 6、項目 38、項目 16 (順に .360 ; .325 ; .254)、「FC」における項目 10、項目 17 (順に .310 ; .083)、「AC」における項目 9 (.341) であったが、既に公刊されている尺度であるため、本調査においては全項目を採用することにした(項目内容については著作権保護のため未記載)。

次に、各下位尺度の内的整合性を検討するために Cronbach の α 係数を算出したところ、ECR-GO の「見

捨てられ不安」において $\alpha = .901$ 、「親密性の回避」において $\alpha = .870$ 、多次元的共感性尺度のうち「共感的関心」において $\alpha = .834$ 、「個人的苦痛」において $\alpha = .798$ 、「ファンタジー」において $\alpha = .833$ 、「気持ちの想像」において $\alpha = .776$ 、TEG II の「CP」において $\alpha = .723$ 、「NP」において $\alpha = .838$ 、「A」において $\alpha = .777$ 、「FC」において $\alpha = .733$ 、「AC」において $\alpha = .851$ であった。各下位尺度の記述統計について表 2 に示す。

表2 各下位尺度の記述統計

	n	Me	range	M	M／項目数	SD	α
見捨てられ不安	34	63.500	27-111	65.118	3.618	18.295	.901
親密性の回避	34	47.000	19-69	45.353	3.779	12.744	.870
共感的関心(11項目)	34	40.500	28-54	40.529	3.684	6.662	.834
個人的苦痛	34	17.500	7-30	17.088	2.848	5.271	.798
ファンタジー	34	18.000	6-27	18.412	3.069	5.494	.833
気持ちの想像	34	18.000	9-25	17.559	3.512	3.711	.776
CP	34	14.000	3-20	13.000	1.300	4.411	.723
NP	34	14.000	5-20	14.471	1.447	4.514	.838
A	34	13.500	4-20	13.088	1.309	4.763	.777
FC	34	12.500	5-20	12.912	1.291	4.252	.733
AC	34	14.000	0-20	12.735	1.274	5.685	.851

3 アタッチメントと共感性、性格との関連

TEG II では妥当性尺度として、妥当性尺度 (L) と疑問尺度 (Q) が採用されており、L は 3 点以上の場合、検査に対する応答態度

の信頼性が乏しいと考えられ、判定には注意を要するとされる (東京大学医学部心療内科 TEG 研究会, 2006b)。本研究における L の range は 0-4 であり、3 点以上は 1 名であった。他方、疑問尺度(Q) は各項目について「1」と回答した合計得点が 32 点以上の場合、判定を保留した方が良いとされる (東京大学医学部心療内科 TEG 研究会, 2006b)。本研究における Q の range は 0-29 点であった。L、

Q の両尺度において判定を保留した方が良いと考えられる者がいなかったことから、本研究においては全員を分析対象とした。また、対象者数が少ない上、男女の人数

表3 性別による各尺度のt検定結果(n=34)

	性別	n	M	M／項目数	SD	t検定
見捨てられ不安	男	9	65.111	3.617	21.310	t(32)=-.001 n.s.
	女	25	65.120	3.618	17.574	
親密性の回避	男	9	52.000	4.333	13.638	t(32)=1.895 n.s.
	女	25	42.960	3.580	11.781	
共感的関心	男	9	39.333	3.576	7.467	t(32)=-.622 n.s.
	女	25	40.960	3.724	6.458	
個人的苦痛	男	9	15.778	2.630	4.024	t(32)=-.867 n.s.
	女	25	17.560	2.927	5.650	
ファンタジー	男	9	17.889	2.981	6.254	t(32)=-.328 n.s.
	女	25	18.600	3.100	5.323	
気持ちの想像	男	9	18.556	3.711	4.447	t(32)=.938 n.s.
	女	25	17.200	3.440	3.440	
CP	男	9	12.222	1.222	4.842	t(32)=-.611 n.s.
	女	25	13.280	1.328	4.316	
NP	男	9	12.778	1.278	4.324	t(32)=-1.327 n.s.
	女	25	15.080	1.508	4.509	
A	男	9	12.444	1.244	5.833	t(32)=-.467 n.s.
	女	25	13.320	1.332	4.432	
FC	男	9	11.111	1.111	3.855	t(32)=-1.510 n.s.
	女	25	13.560	1.356	4.273	
AC	男	9	12.333	1.233	5.701	t(32)=-.244 n.s.
	女	25	12.880	1.288	5.790	

に偏りがあったこと、本研究で使用する各尺度の平均値に男女の有意差は認められなかったことから（表 3）、本研究においては、男女をまとめた分析を行うこととした。

ECR-GO の各下位尺度の平均値を境に対象者を低群・高群に分類し、「見捨てられ不安」の低群・高群、「親密性の回避」の低群・高群をもとに、多次元的共感性尺度及び TEG II の各下位尺度の合計得点の平均値について t 検定を行った（表 4、5）。「見捨てられ不安」の高群

は低群と比較して、「ファンタジー」得点が有意に高く（ $t(32)=-2.771$ $p<.010$ ）、「個人的苦痛」は高い傾向にあった（ $t(32)=-2.016$ $p<.100$ ）。「親密性の回避」の高群は低群と比較して、「NP」、「FC」、「AC」得点が有意に低かった（順に、 $t(32)=5.088$ $p<.001$ 、 $t(32)=2.677$ $p<.050$ 、 $t(28.838)=2.715$ $p<.050$ ）。

表4 「見捨てられ不安」高・低群による多次元的共感性尺度、TEG II のt検定結果(n=34)

見捨てられ不安		n	M	SD	t検定
共感的関心	低群	18	39.722	6.755	$t(32)=-.744$ n.s.
	高群	16	41.438	6.653	
個人的苦痛	低群	18	15.444	4.314	$t(32)=-2.016$ +
	高群	16	18.938	5.756	
ファンタジー	低群	18	16.167	5.448	$t(32)=-2.771$ **
	高群	16	20.938	4.464	
気持ちの想像	低群	18	17.889	3.998	$t(32)=.544$ n.s.
	高群	16	17.188	3.449	
CP	低群	18	13.167	3.869	$t(32)=.230$ n.s.
	高群	16	12.813	5.076	
NP	低群	18	15.000	4.187	$t(32)=.720$ n.s.
	高群	16	13.875	4.924	
A	低群	18	13.889	4.575	$t(32)=1.041$ n.s.
	高群	16	12.188	4.956	
FC	低群	18	13.444	4.579	$t(32)=.770$ n.s.
	高群	16	12.313	3.911	
AC	低群	18	11.333	5.423	$t(32)=-1.558$ n.s.
	高群	16	14.313	5.724	

+ $p<.100$, ** $p<.010$

表5 「親密性の回避」高・低群による多元的共感性尺度、TEG II のt検定結果(n=34)

親密性の回避		n	M	SD	t検定
共感的関心	低群	16	42.688	6.877	$t(32)=1.845$ +
	高群	18	38.611	6.011	
個人的苦痛	低群	16	17.500	6.011	$t(32)=.424$ n.s.
	高群	18	16.722	4.663	
ファンタジー	低群	16	18.813	5.128	$t(32)=.396$ n.s.
	高群	18	18.056	5.926	
気持ちの想像	低群	16	18.375	3.612	$t(32)=1.218$ n.s.
	高群	18	16.833	3.746	
CP	低群	16	12.500	4.619	$t(32)=-.617$ n.s.
	高群	18	13.444	4.301	
NP	低群	16	17.625	3.052	$t(32)=5.088$ ***
	高群	18	11.667	3.694	
A	低群	16	12.250	4.946	$t(32)=-.966$ n.s.
	高群	18	13.833	4.605	
FC	低群	16	14.813	3.619	$t(32)=2.677$ *
	高群	18	11.222	4.138	
AC	低群	16	15.250	3.856	$t(28.838)=2.715$ *
	高群	18	10.500	6.195	

+ $p<.100$, * $p<.050$, *** $p<.001$

4 アタッチメントと自我状態のプロフィールパターンとの関連

中尾・加藤（2004）を参考とし、ECR-GO の各下位尺度の平均値を境としたアタッチメント 4 分類（「安定型」は「不安」低・「回避」低；「拒絶型」は「不安」低・「回避」高；「とらわれ型」は「不安」高・「回避」低；「恐れ型」

は「不安」高・「回避」高）及び TEG のパターン分類に基づき、対象者を分類した（表 6）。その結果、FC 優位型は計 4 名であり、そのうちアタッチメントの「安定型」が 2 名と最も多かった。AC 優位型は計 7 名であり、そのうちアタッチメントの「恐れ型」が 4 名と最も多かった。

表6 アタッチメント・スタイルとTEGパターンによる分類結果(n=34)

	n	%	対象者のアタッチメントの型(n)			
			安定型	拒絶型	とらわれ型	恐れ型
CP優位型	6	17.647%	1	2		3
NP優位型	5	14.706%	2		3	
A優位型	4	11.765%		3		1
FC優位型	4	11.765%	2		1	1
AC優位型	7	20.588%	1	1	1	4
CP低位型	1	2.941%		1		
A低位型	2	5.882%	1		1	
AC低位型	3	8.824%	2	1		
逆N型 I	1	2.941%		1		
W型	1	2.941%			1	

考察

本研究では、アタッチメントを自己モデルと他者モデルの 2 次元から測定する尺度を用いて、他者への共感性を測定する尺度及び自我状態を測定する検査との対応関係を検討した。t 検定の結果から、ECR-GO の「見捨てられ不安」の高さは、多次元的共感性尺度の「ファンタジー」及び「個人的苦痛」の高さと関係性をもつ傾向にあり、ECR-GO の「親密性の回避」の高さは、TEG II の「NP」、「FC」、「AC」の低さと関連性が認められ、予測を一部支持する結果となった。

中尾・加藤（2004）の研究では、ECR-GO の「見捨てられ不安」は自尊感情得点や自己観得点と負の相関があったとされ、ネガティブ情動の過活性化、苦痛に関する思考の反芻、ネガティブな自己モデルを反映しているとされる（Shaver & Mikulincer, 2004/2008）。一方、多次元的共感性尺度の「個人的苦痛」は、他者の苦痛に対して、苦痛や不安など、自分中心の（他者志向的ではない）感情的反応が起こる傾向を示すとされる。また、「ファンタジー」は、小説を読んだり、ドラマや映画を見たりしたとき、登場人物の気持ちになってしまったり、自分だったらどういう気持ちになるだろうと想像したりするという内容で、他者志向的な感情的反応が起こる傾

向である「共感的関心」と異なり、共感がどのように起こるかというプロセスを示す次元なのではないかと考えられている（登張, 2003）。すなわち、先行研究で指摘されてきたように、「見捨てられ不安」は、他者への共感性の中でも他者を慮る共感性ではなく自分自身に注意が向けられた次元と対応関係にあることが示された。加えて、「見捨てられ不安」が「ファンタジー」と関連性をもつということは、見捨てられることへの不安から他者の気持ちを優先させるという依存的な面を強くさせることを表しているのかも知れない。すなわち、見捨てられ不安が強いことは、他者との付着的な関係を築きやすいことと関連するとも解されるであろう。共感性については、発達とともに自己中心的な苦痛から他者志向的な共感が起こるようになるとされる。見捨てられ不安の強さは分離への不安の強さでもあり、情緒面の未熟さと関連する可能性も考えられる。

他方、予測と反し、「見捨てられ不安」と「AC」との有意な相関は認められなかった。Shaver & Mikulincer（2004/2008）は、アタッチメント不安の自己報告がより暴力的な TAT の物語と結びつくとする研究や、アタッチメント回避は分離エピソードへの反応におけるネガティブ情動の不活性化を含んだ物語を予測するのに対

し、アタッチメント不安は活性化を含んだ物語を予測するという研究を挙げている。すなわち、アタッチメント不安は「AC」が表す依存性とは共通項をもつ一方で、いわば従順な傾向とは一線を画す性質のものである可能性が考えられる。

ECR-GOの「親密性の回避」については“他者は援助的良いもの”得点や他者観得点と負の相関があり(中尾・加藤,2004)、ネガティブ情動の不活性化や自尊感情を防衛的に保持することを反映し、防衛的側面が強いとされる(Shaver & Mikulincer,2004/2008)。本研究においては、「親密性の回避」は、共感性のいずれの次元とも関連がみられなかったが、自我状態を測定したTEG IIとの相関から、対人関係に乏しかったり、消極的であったりすることが窺われており、他者関係において防衛的である点は先行研究の結果を支持した。共感性との関連が認められなかったことについては、対象者数の少なさから有意水準に達しにくかった可能性や、共感性は他者の感情に対応した感情的反応が自分自身にも起こることであり他者への関心の強さに関連すると考えられるため、他者関係を回避しようとする「親密性の回避」得点とは関連が認められなかった可能性が考えられる。「親密性の回避」が「AC」と負の関連性が認められたのは、他者との関係性に消極的であるがために、他者に協調することなく、むしろ自分のペースによって行動する特徴を反映していることが考えられる。

更に、アタッチメントの分類と自我状態のパターンとの関連を検討してみると、対象者数が極めて少数であるため補足的な考察となるが、アタッチメントが安定型であることはFCが優位であることと関連している可能性が示唆された。すなわち、アタッチメントが安定していることは、自我の自由さに関連していることが推測される。一方で、アタッチメントが恐れ型であることはACが優位であることと関連している可能性が示唆された。これは、各次元とアタッチメントとの関連を分析した際の、回避の高さとACの低さが関連するという結果とは異なっている。対象者数の少なさが結果の不安定さに影響を与えている可能性が考えられる一方で、遠藤(2008)が安定型以外のアタッチメントの型における適応性を検証することの重要性を示唆していることを踏まえれば、恐れ型は他者との関係に防衛的になると共に、他者への気遣いをするという特徴も有していることが推測される。

以上のことから、アタッチメントと共感性及び自我状態とは一部有意な関連をもつことが実証的に示された。ただし、本研究の限界点についても述べなければならない。中尾・加藤(2004)に掲載されているECR-GOの下位尺度得点の平均値(標準偏差)は、「見捨てられ不安」で男性3.70(1.05)、女性3.81(0.97)、「親密性の回避」で男性3.74(0.92)、女性3.55(0.96)であり、t検定による男女の有意差はみられていない。この値と本研究の値を比較すると、本研究では「親密性の回避」における男性の平均値が若干高いものの、全般的に概ね同様の数値を示しており、本研究の対象者が突出した対象ではないと推測される。しかし、本研究は調査対象者数が少なかったために、たとえ有意な要因であったとしても差が出にくかった可能性が考えられるため、本研究の結果を確定的なものとして捉えることは難しい。今後の研究が俟たれるところである。

引用文献

- 安藤智子・遠藤利彦 2005 青年期・成人期のアタッチメント 数井みゆき・遠藤利彦(編著) アタッチメントー生涯にわたる絆ー ミネルヴァ書房 pp.127-173.
- Bowlby,J. 1969/1982 *Attachment and loss, vol.1: Attachment*. New York : Basic Books.
- (黒田実郎・大羽蓁・岡田洋子・黒田聖一(訳) 1991 新版 母子関係の理論Ⅰ:愛着行動 岩崎学術出版社)
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. 1998 Self-report measurement of adult attachment : An integrative overview. In Simpson,J.A., & Rholes,W.S. (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: The Guilford Press. pp.46-76.
- Cooper,M.L., Albino,A.W., Orcutt,H.K., & Williams, N. 2004 Attachment styles and intrapersonal adjustment : A longitudinal study from adolescence into young adulthood. In Rholes,W.S., & Simpson,J. A. (Eds.), *Adult attachment : Theory, research, and clinical implications*. New York : The Guilford Press.
- (クーパー ,M.L., アルビノ ,A.W., オーカット ,H.K., & ウィリアムズ ,N. アタッチメント・スタイルと個人内適応ー青年期から成人期前期への長期研究ー ロー ルズ ,W.S., & シンプソン ,J.A.(編) 遠藤利彦・谷口

- 弘一・金政祐司・串崎真志（監訳） 2008 成人のアタッチメントー理論・研究・臨床ー 北大路書房 pp.395-420.)
- Davis,M.H. 1994 *Empathy: A social psychological approach*. Madison, WI: Brown & Benchmark.
- （デイヴィス ,M.H. 菊池章夫（訳） 1999 共感の社会心理学 川島書店）
- 遠藤利彦 2008 監訳者まえがき ロールズ ,W.S., & シンプソン ,J.A.（編） 遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・串崎真志（監訳） 2008 成人のアタッチメントー理論・研究・臨床ー 北大路書房 pp. i - vii .)
- George,C., Kaplan,N., & Main,M. 1996 *Adult attachment interview protocol. 3rd ed.* Unpublished manuscript. Department of Psychology, University of California.
- 数井みゆき 2012 アタッチメント理論の概要 数井みゆき（編） アタッチメントの実践と応用ー医療・福祉・教育・司法現場からの報告ー 誠信書房 pp.1-22.
- 中尾達馬・加藤和生 2004 “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究 ,5, 19-27.
- Shaver,P.R., & Mikulincer,M. 2004 What do self-report attachment measures assess? In Rholes,W. S., & Simpson,J.A. (Eds.), *Adult attachment : Theory, research, and clinical implications*. New York : The Guilford Press.
- （シェイバー ,P.R., & ミクリンサー ,M. 自己報告式アタッチメント測度は何を測定しているのか ロールズ ,W.S., & シンプソン ,J.A.（編） 遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・串崎真志（監訳） 2008 成人のアタッチメントー理論・研究・臨床ー 北大路書房 pp.16-50.)
- 島義弘 2012 アタッチメントの内的作業モデルと仮想的有能感の関連 パーソナリティ研究 ,21(2),176-182.
- 登張真稲 2003 青年期の共感性の発達ー多次元的視点による検討ー 発達心理学研究 ,14(2),136-148.
- 東京大学医学部心療内科 TEG 研究会 2006a 新版 TEG II 金子書房
- 東京大学医学部心療内科 TEG 研究会（編） 2006b 新版 TEG II 解説とエゴグラム・パターン 金子書房